

II-5. 学びの森の風景

学びの森の住人たち (7)

—学校でもない学習塾でもない、
〈学びの森〉という世界が投げかけるもの—

アウラ学びの森 北村真也



7. 脱学習、そして再構築

「学ぶっていったいどういうこと何だろう？」そんな思いの中から、この物語はスタートしました。学生ならごく日常的で当たり前の「学ぶ」という活動に対して、ふと疑問を抱いたことから、すべては始まったのです。学生自身が「学びとは何か」という問いを立てることは、ある意味、禁じ手だったのかもしれませんが。日々学ぶという活動を行いつつ、そのこと自体に疑問を投げかけても、どこまで行っても答えを出せないからです。

さらに、「学びとは何か？」という問いは、同時に「教えるとは、いったいどういうことなのか？」という問いを想起させます。

「学び」を再定義していくことは、「教える」ということへの再定義を迫られることでもあるからです。だから今回は、主にアウラの教える側、つまり教師の変容について見つめていきたいと思っています。自律的な学びの場においては、教師そのものの役割も変わらざるを得なくなっていくからです。教師の「教える」には、生徒の「教えられる」が対応し、生徒の「学ぶ」には、教師

自身の「学ぶ」が対応するように思います。だから、アウラにおいては、教師自身も学習者として存在し、彼らもまた変容を遂げていくのです。

ここでは二人の教師に登場してもらいます。ひとは、学校で長年のキャリアを積んできたベテランの先生。もうひとは、大学の先生からの紹介で、アウラの森へとやってきた大学生です。彼らは共に、アウラの森に関わりながら、徐々に今までの自分を再度見つめ直し、やがて新しい自分自身を再構築していく、そんな様子を見ていただけるように思います。



教師の葛藤

その日、T先生がひどく落ち込んでいたのが、先生の毎回書く日報からわかりました。日報には次のように書かれていました。

「中1にとどまらず、どの学年においても自己反省すべき点が多々あり、今後どのようにすればよいのか、しばらく考えたいと思います。あれこれ理由を考えて、自己を正当化しようとする私自身が見え隠れする中、現実にはゼミをやめていく生徒を目の当たりにすると何もいえなくなってしまいます」

T先生は高等学校で20年以上の指導歴を持ち、問題集も執筆されている優秀な先生です。先生が学校をやめたのは、学校というある種の閉鎖性を持った集団の中で、先生のやっていきたい英語教育が十分に実現できないと考えたからだそうです。T先生にとって、自分の生活の安定よりも、自己実現を目指していきたいという思いが優先したのかもしれません。長年勤めた学校での生活に、先生はきっぱりと別れを告げ、今年アウラへとやってきたのです。

アウラにやってきたT先生は、まず子どもたちが自律的に学ぶ姿に、驚きの表情を見せました。優秀な生徒もそうでない生徒も、先生に強制されるのではなく、とにかく自分で学ぶことに対して、「なぜそんなことが可能なのか？」と、よく私に質問をされていたことを思い出します。

そんなT先生が、アウラで教えるように

なって1年が過ぎようとしています。彼にとっては、本当に戸惑うことの多かった1年であったかもしれないと私は思っています。T先生の戸惑いは、「自律的に学ぶ子どもたちに対して、教師は何をするのか？」という問いかけから始まったように思います。学校では、「いかに子どもたちを自律的な学習者に育てるか」ということが大きな教育目標になるのですが、子どもたちが自律的に学んでいるアウラにおいては、「教師は、何をするのか」ということを考えなければなりません。自律的な子どもは、すでに学習リテラシー（学びの型）を身に付けているので、未知の内容に対して自分で説明を読んで理解し、演習を使ってそれを確認することができるのです。つまり、彼らは個々の単元について、一つ一つ教えられることを必要とはしていないのです。

「教師は何をするのか？」今まで学校に長年勤めて、1から10まで教えてきたT先生にとって、その戸惑いはいわば当然のことだったのかもしれません。その後、T先生は試行錯誤を繰り返しながら、自分の存在感をアウラという場の中に表現されていかれました。そのひとつは、彼が長年こだわってきた口頭練習であり、もう一つは大学受験指導です。T先生は、アウラの教育の弱い部分に目をつけ、そこに自分の培ってきた経験が発揮できるように自らを表現したのです。

ところが、そこでも戸惑いがありました。どうしても、教師主導型の指導が表に出してしまうのです。生徒との間にいくつもの葛藤が生まれ、そのたびごとにT先生と私は

話し合いの場を持ちました。アウラは学校とは違って、子どもたちに〈辞める権利〉があります。それが彼らに保障されているからこそ、私たちは自分たちの独自の教育を展開できるわけです。ところが、通常学校の生徒にはその権利がありません。学校を辞めようと思えばできるのですが、それには多大なエネルギーを必要とするからです。その上、教師には彼らを評価する権利が与えられています。つまり「成績を下げるぞ」と彼らに脅しをかけることさえできるのです。しかし、アウラには〈評価〉というものが存在しないのです。

「アウラの先生は、丸腰のようなものですね」

T先生の言った表現は、とても的を射たものだと思います。だからこそ、教師は鍛えられるのです。ここには、子どもたちを教師に従わせる〈評価〉が存在しない。しかも〈辞める権利〉が保障されているのです。生徒が辞めて落ち込むT先生に、私は声をかけました。

「生徒が辞めることは残念なことです。しかし、それを少し離れた視点で捉えると、だからこそ教師は鍛えられ、教育が洗練されていくように思います。アウラの先生には、常に自分を振り返り、反省することが求められます。毎年同じことを繰り返すのではなく、新しく出会う子どもたち一人一人とその関係を構築しながら常に新しい教育を作り上げないといけないように思うのです」

「そういっていただくと、ありがたいです」

「私は、T先生はすごいなって思うんです。そのすごさは、自省的であるということです。

自分を固定化し正当化するのではなく、常に考え続けようとしている。そういう〈学習者〉という姿勢をしっかりとっておられる。私は、そこに感動するんです」

「もちろん、葛藤はあるんです。でも、子どもたちや塾長を見ていると、新しい自分を見出したいと思うようになってきたんだと思います」

「がんばってください。T先生らしい教育を、ぜひアウラで実現してください」

「ありがとうございます」

その後のT先生の日報には、こんなことが書かれていました。

「中3は公立高校の入試が終わり次第、また高校1年生は学年末試験が終わり次第、次年度に向けての課題を出したいと思います。誰でも新たなスタートラインに立ったとき、頑張ろうという気持ちが生まれてくるものです。その気持ちを失わせることなく、これからの英語学習をどのように指導していくか…。私にとっては、また大きな課題ができてしまいました」

これからもT先生の葛藤を伴いながらの挑戦は続いていくことでしょう。しかし、この葛藤は建設的な葛藤です。自己変容につながる葛藤です。学校というフレームとアウラというフレーム、そのフレームの違いに戸惑いを見せたT先生、それはある意味で当然ことなのでしょう。もし先生が、学校現場に今でも居続けたなら、おそらくこの学校というフレームに、先生自身が気付くことはなかったかもしれません。学校から飛び出したからこそ、初めて見えてく

るものがあるのかもしれませんが。



自分自身のために

大学の先生の紹介で、ゼミ生のFさんが、アウラにやってきました。私が先生にアウラの講師募集のお願いをし、先生がゼミの時間に学生たちに打診をしてくれたのです。そんな中、Fさんは、「フリースクールに興味があるので」という理由で、手を挙げてくれたそうです。Fさんは、私たちの掃除の時間にやってきました。私は事前に面接をしていただいたのですが、子どもたちにとっては今日が彼女との初対面の日です。

「何か手伝いましょうか？」

「じゃ、T子ちゃん、Fさんに掃除の仕方教えてあげられる？」

「はい」

Fさんは、子どもたちに教えられながら掃除機をかけていました。アウラに昼間に通う子どもたちには、毎日掃除の時間があります。1階、2階の教室、休憩室、玄関、外回りの掃除、それから水槽の手入れを必ず先生と一緒にしておこないます。毎日

当たり前のように掃除をおこなうのです。

掃除が終わり、みんなは午後からの学習課題に取り掛かります。チャイムも、先生の掛け声ありません。みんな自分でさっさと取り掛かるのです。

「じゃあ、紹介しましょう」

「えーっと、〇〇大学のF先生です。現在3回生。私の後輩です」

「それから、この子が中2のR君、同じく中2のHちゃん。それから中3のT子ちゃん、Y子ちゃん。あと高3のY君」

私は、知誠館のメンバーをFさんに紹介しました。紹介が終わると、彼らはいつものように自分たちの学習に取り掛かっています。

「子どもたちの学習教材と学習内容は、彼らに説明させますから」

「T子ちゃん、T子ちゃんの教材、どんな風に進めてるか、F先生に教えてあげて」

「はい」

「じゃあ次は、R君、君の学習の進め方を説明してあげて」

「はい」

こうして、子どもたちは、それぞれの学習の進め方やその教材の仕組みを彼女に説明をしていました。そしてその後、高校からの来客があり、私は、その場を子どもたちとFさんに任せて、面談へ上がっていききました。

その後、私は来客の対応が長引き、面談

が終わった時には、子どもたちはもう帰り仕度をしているところでした。

「どうでしたか？」

「いや、驚きました。私たち大学生より、よく勉強していました。すごいなって本当に思いました」

「そうですか、でもこれは彼らの日常生活であって、当たり前の世界なんです。彼らは毎日毎日、こんな生活を黙々と続けているんです」

子どもたちが帰ってから、私はFさんから、彼女自身の話を聞きました。Fさんは金沢出身で、金沢の持つ閉鎖的な価値観が嫌で、とにかくそこから出たいという思いが強く、姉が京都の大学に通っていたこともあり、この〇〇大学に入学したそうです。彼女には、中学時代に学校へ行きにくかった経験がありました。当時の学校に対して大変抑圧的な印象を持っていたそうです。そんな学校に反発することもなく、彼女はただ家で固まったまま時を過ごしました。そして、彼女にとっては大変暗い中学校時代のイメージが作られていったのです。

「ここアウラは、あくまでも学びの場ですから、彼らの心の問題を直接扱うことはないです。私たちと彼らは〈学ぶ〉ということを通して関係が作られているんです。でも私の中では、絶えず彼らの心の状態が意識されています。彼らのほとんどは、傷ついてアウラにやってきます。学校に行かないという選択は、自ずと彼らを〈問題のある子ども〉に追いやってしまうのです。そして彼らは自分自身を否定していく。つまり彼らにとって不登校と

いう経験には、暗い、ネガティブな意味付けがされているわけです。私は、その意味付けを彼ら自身が書き換えることができればいいなあって思ってるんです。学校にいかなくなって初めて気がついたこと、初めて考えたこと、初めて行動したこと、思い返せばそこにはたくさんの〈初めて〉があるはずですよ。その〈初めて〉に気がついて、そこから世界を眺めてみて、新しい自分の存在に気がついてほしいんです」

「私もそこ向き合いたいんです」

「そうですよね、あなたも向き合うべきだと思いますよ。彼らと一緒にね」

「私で務まりますか？」

「Fさんは、彼らにとっては先生です。学生じゃない。先生は、彼らにサービスを提供するという役割がある。ところがある意味で、あなたと彼らは同じ種類の課題を抱えている。だからそこに、“先生として務まるかしら”という躊躇がある。でも私は思うんです。あなたの子どもたちへの最大の貢献は、あなた自身が自分の過去を書き換え、変容していくことで彼らのロール・モデルになることだと…、そう思いませんか？」

「できますかねえ…」

「できますよ。あなたは自分のために頑張ればいい。きっとそれが彼らのためにもなる」

「はい、頑張ってみます」

こうしてFさんは研修生として、週1日彼らと関わることになりました。彼女は今、大学の授業の中で〈羅生門的現実〉を学んでいるといます。この〈羅生門的現実〉は、黒沢明監督の映画『羅生門』に由来する社会学のコトバで、ある状況の中に並走する複数の文脈性を意味しています。そし

てその状況が今、彼女の前に現実の場面と
なって現れ、しかも自分自身がその登場人
物として関わることになっていったのです。
彼女自身の課題が、子どもたちの課題と重
なり、しかもそれは大学、そしてアウラと
いう異次元の世界の中で、共に「教師と生
徒」という関係性を伴って交差していくと
いう状況がそこに広がっていったのです。



彼女が語り出すとき

その後Fさんは、毎週アウラへとやって
来るようになりました。そして、子どもた
ちに関わり、教科の学習のお手伝いをし、
授業終了後、私とその日あったことについ
て振り返りをおこない、自宅に帰ってから
それをもう一度文章化して私宛にメールで
送ってくれるようになりました。以下は、
その文章の一部です。

知誠館に行くのは今日で六回目。たったの
六回だが、私の中でいろんなものが変化して
いる。一つの事象に対して、以前より視点を
多く見出せるようになった。そして、すべて
のことは繋がっているのかもしれないと思う
ようになった。何かひとつでも一生懸命取り

組めば、それによって得た力が他のことにも
応用できる。そして何より、一生懸命やった
という経験が自信となり、自分を支えてくれ
る。反対に、何事に対してもいいかげんにや
っていると、それに対する後ろめたさが自信
を失う原因となり、物事を楽しむことができ
なくなってしまう。そして同じことを繰り返
す。まるで負のループだ…。

Fさんの中で起こっている変化、それを
彼女は次のような抽象的なコトバを使って
表現しようとしています。

〈視点を多く見出せるようになった〉

〈すべてのことが繋がっていると思える〉

〈一つのことを一生懸命取り組めば、それによ
って得た力で他のことにも応用できる〉

〈自信が自分を支えてくれる〉

彼女の中で生じた変化は、テストである
点数を超えられたとか、何かの資格が得ら
れたとか、そんな具体的なものではありません。
それは、抽象的であり、主観的であり、ど
こかあいまいさを含んだものであるのかも
しれません。だけど、彼女は変わり始めて
いるのです。確実に変わり始めているので
す。

彼女の変化、それは彼女の視界そのもの
の変化と言えるかもしれません。彼女の見
ている世界そのものが変化し始めたので
す。だからこそ、同じ風景を見て、以前はバラ
バラに存在していたモノが、繋がりを持ち
始めるのです。J.メジローは、このような
変化を〈パースペクティブ変容〉と名付け、
具体的な対象の変化〈スキーマ変容〉と区

別して捉えました。そして学びの本質的な目的を、この「〈パースペクティブ変容〉が生じていくこと」においたのです。そういった意味では、彼女は、今まさに自ら語り始めることによって、どこか今までとは違う、今まで経験したことのない学びの世界を垣間見たのかもしれませんが。

20歳にしてやっと気が付いた。やはり私は同世代の人達に比べてかなり幼い。

今日の塾長の、「あまり生徒を子どもとしては扱わない」という話にとっても共感した。自分の14歳のころを思い出すと、大人たちが思っているより、いろんなことを考えていたような気がする。子どもは、大人が思っているより大人だ。それに、20歳になった今も、私は大して変わっていないように思うからだ。私は立場としては一応先生だが、先生と呼ばれるような人間ではない。だから、できるだけ生徒が見ている世界に近づいていろんなことを考えてみようと思う。

自省的な彼女の文章、そこからFさん自身の謙虚な姿勢が伝わってきます。生徒たちへの関わり方を見て、彼女は自分自身の過去を振り返り、現在を振り返ります。私のことを自分自身の課題として見ていくことで、新しい自分の存在が見えてくるのです。そしてふと気がつく、彼女の語りが私の語りと同様になっていることに気がつきません。彼女が語り始めた時、それはアウラの学習者となったことの証であるのかもしれませんが。



過去を編集する

人間は絶えず過去を書き換え、編集しながら生きている。だからこのことは、決してよそよそしいことではなく、あらたまって考えないといけないことでもありません。生きている限り、当たり前のことなのです。けれども一方で、世の中には過去に縛られて生きていかざるを得なくなってしまっている人もたくさんいます。過去の囚われです。だから、何かのきっかけで過去が大きく編集されるような出来事が必要なのかもしれません。

その後のFさんは、少しずつ自分自身の過去を編集し始めました。過去の呪縛から自分自身を解放し、自分でそこに新しい意味を添えていく、まさに編集。そんな彼女の動きが、送られてきた文章から読み取れます。

今日一番驚いたのは、R君がアウラを休み通院し始めたことだった。塾長によると、ちょうど一週間前のケーキ教室に行ったあの日の午前、彼からは明らかな異変がみてとれたそう。私は全く気付いていなかった。それに気付かず、私は一体何をしていたのだろう。

私の姉は、鬱病で大学を中退した。幸い今は随分よくなっている。私が京都に出てきて最初の一年は、姉と二人暮らしをしていた。最初の一年だけは二人で住むというのが両親との約束だった。

彼女に鬱の症状が出始めたのはそれより以前のことだそうだが（正確にいつなのかはわからない）、本人は私たち家族には内緒にしていた。二人きりでひとつ屋根の下で暮していれば、嫌でも異変に気付く。大学に進学するまで金沢の実家でともに暮らしていたころの姉とは明らかに違うのだ。

私はそんな彼女を見るのが怖かった。幼いころから記憶にある姉の姿とは別の人格になっていくようだった。怖くて、見て見ぬふりをした。気付いたときに両親に助けを求めていけば、姉の苦しみを軽減できたかもしれない。誰よりも苦しんでいたのは彼女なのに、私は自分の苦しみにから逃れるため現実から目をそむけ続けたのだ。

大切な家族を守れなかったことは後悔してもしきれない。R君の話を聞いてこんなことを思い出してしまった。



循環システム

Fさんから、今日もレポートが届いた。私は、彼女の真摯な生きる姿勢に感動を覚える。まだたった二カ月しかたっていないのに、彼女の見ている世界そのものが変化していく。そして、その異なる風景に彼女は反応し、再び彼女の見つめる世界を変えていく。ここにも循環がある。どんどん変化していく状況の背景には、こんな風な循環のシステムがあるのかもしれない。では、彼女からのレポートを紹介しよう。

今日はアイスを食べながらみんなで高校の話をしたのが印象的だった。こんな風に全員でゆっくり話したのは初めてではないだろうか。

みんな高校には希望を持っているようだ。きっとみんな問題なく志望校に合格できると思うが、大事なのは入学後どうい生活を送るかだ。そのことをみんなにきちんと伝えていきたいと思う。

私はアウラに通い始めてまだ二カ月たったばかりで、彼らに会った回数なんて10回ほどなのに、二か月前と今ではずいぶん世界が変わった。二か月前は気にも留めなかった芸能人がテレビに映るとみってしまうし、本屋で生徒が読んでいた本を見つけると手に取ってしまうし、バイト帰りにランニングしている人とすれ違うと生徒が毎朝走っている姿を想像する。

私の目に見える世界は確実に変化している。

関係性を築くというのはこんなに面白いことなんだ、と改めて思うのは、関係性をもった相手が普通に大学生を送っていたら決して出会うことのなかった人物達だからなのだろう。

同世代の大半とは違う道を歩むことになった彼らの眼に映るアウラでの日常はどんなものなのだろう。私の二ヶ月間の変化のように、与えられた日常を抜け出して、見える世界は確実に変わったはずだ。ここでの経験は彼らの人格形成の一つの構成要素になることは間違いない。どう捉え、どう整理して今後の人生を送っていくのだろうか。三年後、五年後の生徒たちが楽しみだ。

アンラーニング

アンラーニングとは、これまでに学んだことを意識的に忘れて、新たに学び直すこと。「学習棄却」とか「脱学習」などと訳されることが多いのですが、哲学者の鶴見俊輔は、ヘレン・ケラーが口にした **unlearning** というコトバを「学びほぐし」と表現しました。既製品のセーターの糸をほぐして、自分のカラダに合う形に編み直すイメージなのです。

今回ここで取り上げたT先生、そしてFさん。彼らはどういうわけか、アウラに関わることを通して、これまでの自分自身を振り返り、このアンラーニングを重ねていったように思えます。自分自身を新しく更新すること。私はこれこそが、学びという活動で最も大事な要素、つまり学びを通し

た変容なのだと思います。

アウラでは、子どもたちだけではなく、教師たちもまた自らを振り返り、学習者となることでアンラーニングを繰り返し、また新しく再構築を重ねながら変容を遂げていきます。彼らの変容の動機の一つに、アウラの子どもの変容の過程があることは言うまでもありません。つまり、ここアウラでは、変容が層のように重なり合いながら、独自の磁場を形成しているのかもしれませんが、アウラに関わることで、どういうわけかアンラーニングが起こってしまうのです。ギブソンの〈アフォーダンス〉やユクスキュルの〈環世界〉が私たちに語りかける世界と、それはどこかで共通する世界なのかもしれません。